

歴史探訪

クラブ

其の
102



History Inquiry Club

文化財課 ☎23局 3635

FAX 22局 3811

渥美半島の農業発展を支えた 木造温室

田原市は、平成18年度の農業産出額で全国一位となっています。電照菊をはじめとする花卉^{かき}、キャベツやブロッコリーなどの野菜、メロンなど自慢できる作物ばかりです。中でも、渥美半島の農業を印象付けるのは温室による電照菊の栽培でしょう。渥美半島で温室による施設園芸を最初に始めたのは、岡田儀八（小塩津町）で、昭和7年のことでした。メロンやキュウリなどを栽培し、高収益を上げ、温室は伊良湖岬村全域



▲木造温室(昭和40年ごろ)

花のない時期に花を出荷できるようなり、日本一の電照菊の産地となったので。雨水を桝に溜め導水するなどの

に広まりました。戦時中は、統制により温室を縮小せざるを得ませんでした。戦後、電照菊の開発によって復活します。昭和23年、小久保英男（堀切町）が家庭用の電線から配線し、温室の電照を始めました。電照菊の原理は菊の花芽ができる前に電照し、人工的に日照時間を長くすることにより、開花時期を遅らせることです。この電照は、温暖な気候で暖房がない温室から、さらに一歩進んだ技術開発です。導入時は電気確保や電照時間の決定など、苦勞をしたに違いありません。そのかいあって、



▲温室内の作業風景(昭和32年ごろ)

効率が良くなかった水撒きは、昭和43年に豊川用水が通水されたことで、問題が解消され、経営は拡大していきましました。現在では、施設や技術改良を進め、田原市は花卉^{かき}の産出額日本一の地へと躍進しています。これらの発展を支えた原点が木造温室です。木造温室の造りは、コンクリートの基礎、木製の主体構造に屋根、そして壁にガラスをパテではめ込んだものです。木材は白く塗られ、これまでの建物とはまったく違う直線的で洗練された美しい外観です。木造温室は、ガラス、木が破損しても修理しやすく、また改造も簡

単で建設費用も安価という利点があります。そのため、昭和34年の伊勢湾台風では、木造温室も被害に遭ったものの、修理して再使用できた農家が大半でした。産業としての特色だけでなく、9月10月に不夜城のように輝くこの景観は「ガラスの半島」と形容されました。渥美半島の電照菊の夜景は、常春の半島のイメージと独特の景観から、人々の憧れの風景として観光資源の一部となりました。

現在でも、現役で大事に使用されている木造温室もあります。渥美半島農業の立役者である木造温室を見て、先人たちの情熱を感じ取ってみてはいかがでしょうか。（増山）

今月の「表紙」

▼浜風にそよぐハマカンゾウ。市内では江比間海周辺などでも群生地が見られます。岩場などの過酷な環境で、鮮やかなオレンジ色の花を咲かせるハマカンゾウは、私のお気に入りです。伊良湖岬では10月初旬まで見られますので、足を運んでみてはいかがでしょうか。○

【表紙の写真】江比間海岸のハマカンゾウ